

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 7 日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520154

研究課題名（和文） ドイツにおける「移民映画」研究

研究課題名（英文） Migrant Cinema in Germany

研究代表者

渋谷 哲也（SHIBUTANI TETSUYA）

東京国際大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：90438789

研究成果の概要（和文）：戦後ドイツ映画における移民表象の変遷を辿りながら、移民をめぐる社会状況の変化を考察した。とりわけ日本では無名ながらドイツでは高い評価を受けているトルコ系移民二世の映画作家トーマス・アルスランの作品を取り上げ、トルコや移民というテーマを扱う際にいかに紋切り型的表現から距離を取り、社会の多様性を浮き彫りにする手法を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Based on the representation of immigrants in the German film, the change in the image of immigrants in Germany are considered in the postwar period. Especially is focused on the film-maker Thomas Arslan, who is a renowned director in Germany, but is in Japan virtually unknown, in order to recognize his cinematic concerns exactly to deal with the stereotypes about immigrants, and to make show the diversity of the Society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2011年度	500,00	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・表象文化論

キーワード：ドイツ映画

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の時代における「移民」という社会現象を映画に描写する試みは、第二次大戦以降先進国の映画において見られるようになった。こうした「移民映画」を手がかりに移民イメージの変遷を見てゆくことで、移民をめぐる社会状況の変化を多面的に考察できるようになっている。ただし英国やフ

ランスと比較すると「移民映画」の製作や研究はドイツにおいては遅れており、包括的な研究成果が発表されるようになったのは 90 年代以降になってのことである。しかもこうしたドイツ映画研究は日本ではほとんど紹介されてこなかった。またそもそもドイツ映画が日本に紹介される機会が極めて限られているため、ドイツ国内における「移民映画」

の多様な展開を知る機会もほとんどない状況である。

2. 研究の目的

第一に、20世紀後半ドイツ映画における外国人移民の表象を概観することが目的である。その際映画の内容と美的特徴とを関連付けることに重点を置いた。「移民映画」とは、移民を登場人物として現象面だけを取り上げるものに限らず、作り手が移民として自身の問題意識を提示する場合も含まれる。つまり映画作品と作者の関係、そしてそれを取り巻く社会や制度を包括的に考察することが重要となる。また映画史的なコンテキストや美的な様式性を視野に入れるなら、ドイツ映画の歴史における移民の表象だけでなく、他国における同様の映画との比較対象を行うことも要点となる。

第二に、ドイツ映画において特徴的な映画作家の作品をピックアップし、その独自性を社会批判的観点と美的観点の双方で明らかにすることを目的とした。とりわけライナー・ヴェルナー・ファスビンダーとトーマス・アルスランに注目した。ファスビンダーはドイツにおいて最も初期に外国人労働者問題を取り上げた監督であるが、その技法や描写の特徴について「移民映画」の観点を前面に出して考察されたものはいまだ少ない。そうした考察はファスビンダー映画の研究においてさらなる重要な指標をもたらしてくれるはずだ。またアルスランは日本ではほぼ完全に無名な映画作家である。彼の映画を紹介するのは研究の前提条件として絶対的に重要である。その上でアルスランの独自の様式性や、移民二世という立場からどのような映画的特徴が浮き彫りになるかを明らかにすることを試みた。

3. 研究の方法

まず1960年代から21世紀初頭までのドイツにおいて移民を扱った作品の特徴を概観した。まず欧米で出版されている書籍や雑誌を通して時代ごとの変化を明らかにした。その中で、とりわけ重要な映画作家としてライナー・ヴェルナー・ファスビンダーとトーマス・アルスランを取り上げた。どちらもニューシネマの土壌から映画製作を行っている映画作家たちであり、一般商業映画やテレビドラマ等で取り上げられる移民イメージとは一線を画する描写が行われている。

ファスビンダーは家族や個人的な関係における愛と感情の搾取の問題を主要に取り上げる映画作家だが、外国人労働者を主役にした『出稼ぎ野郎』『不安は魂を食いつくす』という2作品がある。これらにおいてファスビンダーの普遍的なテーマが外国人を題材にどう展開しているかを明らかにすること

で、単なる外国人や移民に関する問題に囚われない幅広い問題提起が行われている。こうした手法を映画の詳細な分析で明らかにした。

アルスランはドイツで90年代後半より注目を集めてきた監督である。彼はフランスの映画作家ブレッソンやロメールなどの影響を受け、静的かつリアリスティックな撮影方法を特徴とする。そうした手法が他の映画での移民表象の典型的イメージの使用法とは根本的に異なり、むしろ移民描写の紋切り型に鋭い批判を投げかけている。しかも普遍言語としての映像を重視する独自のスタイルを作り上げている。そうした美的特性が近年のポストコロニアルの言説とどのように関連付けられるか明らかにすることを目指した。

以上の観点で学会発表および映画上映に際し講演を行い、その結果を踏まえて論文の形で仕上げることにした。

またアルスランについては、日本に招聘し、実際に作品の上映会を催し、監督との対話を深めてゆくことを試みた。

4. 研究成果

1960年代以降ドイツにおける移民のイメージを概観するなかで、時代による描写の変化が明確に現れてきた。まず外国人出稼ぎ労働者はすでに50年代からドイツに数多く滞在しているにもかかわらず、映画の中に大きく取り上げられるのは70年代以降のことである。しかも当初は男性登場人物が中心であったが、70年代中盤以降の映画では大半が女性主人公となるのが特徴的だ。そこには70年代に出稼ぎ労働者が家族をドイツに呼び寄せたことで女性移民の数が増え、またドイツ定住者が増えたことにも原因があると考えられる。そうした状況下で80年代以降には、移民一世と2世の葛藤を描く作品が登場し始める。

だが初期の移民映画では、外国人はドイツ社会から疎外された哀れな犠牲者として描かれることが通常であり、ドイツ人監督であれ移民出身の監督であれ、そうしたステレオタイプが強調される事情は現在まで余り変化しないという事実が浮かび上がる。つまり移民のイメージはものいわぬ労働者、路上にたむろする犯罪者、家父長制に虐げられる女性などの紋切り型表現ばかりが登場することになる。それは娯楽映画だけでなく、ニュース報道でも頻出するイメージである。

こうした紋切り型に囚われない表現を行うことは極めて困難であるが、今回取り上げたファスビンダーとアルスランはそれぞれ異なる方向から、移民に対する偏見やネガティブイメージに対して鋭い問題提起的な映画製作を行っているのが明らかになった。

ファスビンダーの場合は、ドイツ人の持つ偏見や紋切り型的イメージをドイツ人の台詞や反応において敢えて典型的に強調し、偏見それ自体が、移民の客体に投影されるイメージに過ぎないことを示した。そこでは確かに移民自身の特性は示されず、彼らの他者性が却って強調されることになるのだが、その一方でそうしたイメージの投影や類型化は他のドイツ人登場人物にも同様に用いられており、登場人物全体の関係性の中で差別や偏見のメカニズムが浮き彫りにされるという意義がある。

一方アルスランは、一旦は紋切り型の人物設定を用いながら、映画の進行と共に過剰な類型化から逃れてゆくような登場人物の性格付けを行っている。人物のアイデンティティを移民2世という点だけに固定するのではなく、それ以外の社会的・心理的要因を関連付けることにより、レッテルそのものを問題視するような手法が用いられている。これはアルスランのリアリスティックな撮影の手法あってこそ効果を挙げるものである。

とりわけトルコ系移民二世であるアルスラン監督は、移民のアイデンティティを中心問題とせずに「移民映画」を制作してきたが、近年ではトルコや移民という主題と無関係な映画を制作するようになってきている。90年代以降多くのトルコ系移民2, 3世監督がドイツでデビューし、現在まで創作活動を続けているのだが、こうした幅広い視野で製作を行う傾向は一部の映画作家の間で増してきている。近作も含めて彼の代表作をほぼ全て日本語字幕付きで上映する機会を得て、アルスランの作風と一貫性と変化を間近に考察することができた。

上映は3つの期間に渡って行った。まず初年度は2010年1月、ドキュメンタリー映画『彼方より』を上映し、アルスラン監督についての講演を行った。会場はアテネ・フランス文化センター(東京)とplanet+1(大阪)である。

続いて二年目は2010年10月、ベルリンのトルコ系移民二世の若者を主人公にした劇映画三部作『兄弟』『売人』『晴れた日』を上映し、アルスラン監督における移民というテーマとドイツ映画としての特徴について講演した。これも東京と大阪で行っている。当初の予定ではこの機にアルスラン監督を日本招聘する予定だったが、監督自身の都合で叶わず延期となった。

3年目となる3回目は東京のみの開催で、2012年3月に監督を日本に招いて、過去に上映した4作品に加えて最近作『休暇』『イン・ザ・シャドウズ』を上映し、アルスラン監督の主要全作品のレトロスペクティブを行った。また4日間に渡り映画上映後の公開討論会を行った。ここではアルスラン監督の独自

の映画手法の中から「移民」というテーマへの独自の接近法が明らかにされた。しかもそれが彼の映画技法や世界観と密接に結びつくことが明確化され、有益な考察を得ることが出来た。監督の来日が研究期間の最後の時期となったため、その成果を学会発表や論文で公表するのはこれからの課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①渋谷哲也、移民映画から作家映画へ、ドイツ研究、査読あり、2012、121-131

[学会発表] (計4件)

①渋谷哲也、出稼ぎ野郎から売人へドイツ映画における移民の表象について、日本ドイツ学会総会、2010年6月12日、成城大学

②渋谷哲也、トーマス・アルスラン監督作品の解説、2010年10月20日 アテネ・フランス文化センター(上映会に際しての講演)

③渋谷哲也、ドイツの<移民映画>、40年の歴史を辿る、2011年10月14日、アテネ・フランス文化センター(上映会に際しての講演)

④渋谷哲也、トーマス・アルスラン監督『晴れた日』の解説、2012年3月7日、アテネ・フランス文化センター(上映会に際しての講演)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渋谷 哲也 (SHIBUTANI TETSUYA)

東京国際大学人間社会学部・准教授

研究者番号：90438789

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：